

学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS） ～SWPBS 1年目の取組～

志布志市立有明小学校 教諭 村永 法子

目 次

はじめに

1 実践テーマ	2
2 テーマ設定の理由	2
3 実践のねらい	3
(1) PBSを学校全体で組織的に行う SWPBS とは	
(2) SWPBSを構成する4つの要素	
(3) SWPBS実施の4つの段階	
4 実施計画	4
5 実際	4
(1) チーム編成	
(2) 開始時期のずらし	
(3) 専門家による講義	
(4) 期待する行動の明確化	
(5) SWPBSキャンペーンのスタート	
(6) データに基づく意思決定	
(7) 保護者や地域社会との連携	
6 実践の成果と今後の展望	9

おわりに

〔引用・参考文献〕

- | | | |
|---|---------------|------|
| ・『スクールワイドPBS研修』 | 立元真（宮崎大学）講演資料 | 令和6年 |
| ・『スクールワイドPBS研修Ⅱ』 | 立元真（宮崎大学）講演資料 | 令和6年 |
| ・『生徒指導提要（改訂版）』 | 文部科学省 | 令和4年 |
| ・『学校全体で取り組むポジティブ行動支援スタートガイド』 | | |
| 若林上総（宮崎大学）、半田健（宮崎大学）、田中善大（大阪樟蔭女子大学）、庭山和貴（大阪教育大学）、大対香奈子（近畿大学） | ジアース教育新社 | 令和5年 |
| ・『学校全体で取り組むポジティブな行動支援』 | 徳島県立総合教育センター | |
| https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000565075.pdf/ （参照 2024—12—25） | | |

はじめに

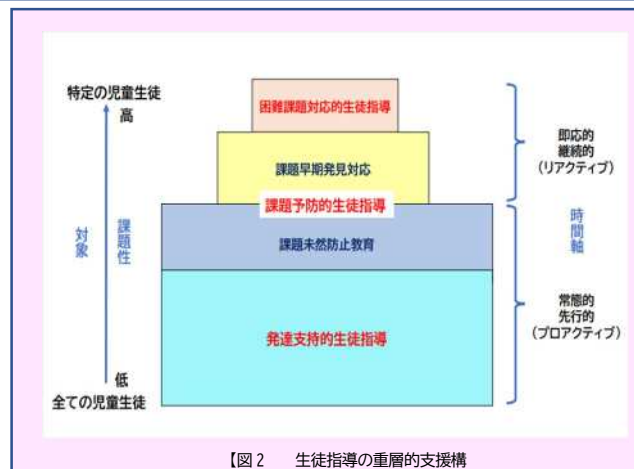
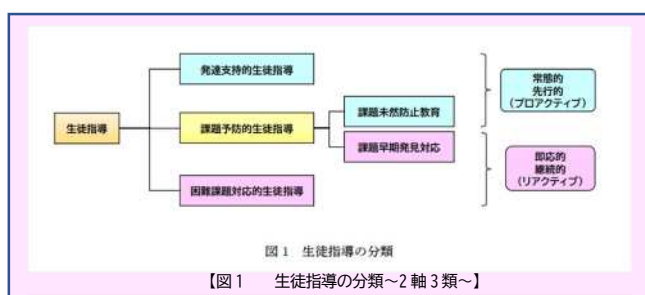
子供たちの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育には、子供の発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められている。生徒指導は、一人一人が抱える個別の困難や課題に向き合い、「個性の発見とよさや可能性の伸長、社会的資質・能力の発達」に資する重要な役割を有している。今日的な課題に対応していくため、2022年に「生徒指導提要」が12年ぶりに改訂された。（文部科学省2022:以下、生徒指導提要改訂版）

生徒指導提要改訂版では、「生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことであり、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の獲得を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とし、生徒指導の目的を達成するためには、児童生徒一人一人が自己指導能力（深い自己理解に基づき、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力）を身に付けることが重要」とある。

2軸3類は、児童生徒の課題への対応を時間軸や対象、課題性の高低という観点から類別することで、構造化したものである。（図1）

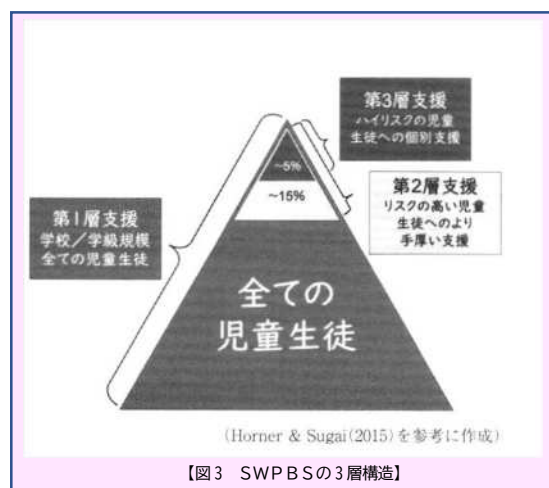
図2は、図1の2軸3類に加えて、生徒指導の対象となる児童生徒の範囲を示したものである。全ての児童生徒を対象とした第1層「発達支持的生徒指導」と第2層「課題予防的生徒指導：課題未然防止教育」、一部の児童生徒を対象とした第3層「課題予防的生徒指導：課題早期発見対応」、そして、特定の生徒を対象とした第4層「困難課題対応的生徒指導」の4層から成る「生徒指導の重層的支援構造」である。

発達支持的生徒指導は、全ての児童生徒を対象に、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程内外の全ての教育活動において進められる生徒指導の基盤となるものである。児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくこの過程を学校や教職員がいかに支えていくかという視点に立っている。日々の挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、授業や行事等を通した個と集団への働きかけによって、児童生徒のコミュニケーション力や人間関係形成力、協働性、自己理解、他者理解、問題解決力などを含む社会的資質・能力、自己のキャリアをデザインする力等の育成を目指している。課題未然防止教育とは、全ての児童生徒を対象に、生徒指導上の諸課題の未然防止をねらいとした意図的・組織的・系統的な教育プログラムを指す。課題早期発見対応とは、課題の予兆行動（成績の急落、遅刻・早退・欠席の増加、身だしなみの変化など）を示す一部の児童生徒を対象に、課題の深刻化を防ぐことをねらいとした早期発見・早期対応を指す。困難課題対応的生徒指導は、いじめ、不登校、少年非行、児童虐待など深刻な課題を抱えている児童生徒を対象に、校内の教職員だけでなく、関係機関と連携・協働し



て行うものである。

特に、今改訂では、課題予防・早期対応といった課題対応の側面のみならず、児童生徒の発達を支えるような生徒指導の側面に着目し、その指導の在り方や考え方について説明が加わった。若林ら（若林ら、2023「学校全体で取り組むポジティブ行動支援スタートガイド」：ジアース教育新社）は、学校現場では、発達支持的生徒指導や課題未然防止教育のように、全ての児童生徒に対して、日常的な働きかけや課題の未然防止をねらいとした教育プログラムに積極的に取り組んでいく必要があるとしている。また、さらに、生徒指導の重層的支援構造とSWPBS（School-Wide Positive Behavior Support、学校全体でのポジティブ行動支援）の3層支援モデルの構造（図3）は、全ての児童生徒から課題を示す特定の児童生徒を対象とした階層的な支援をモデル化している点で、高い親和性を有し、SWPBSの第1層支援の取組は、全ての児童生徒を対象に、児童生徒の問題行動を予防する支援を組織的に実施することから、発達支持的生徒指導や課題未然防止教育の取組として参考になるとしている。



1 実践テーマ

学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）
～SWPBSⅠ年目の取組～

2 テーマ設定の理由

校内で共通する課題を洗い出すアンケートを実施した。Microsoft Formsにて無記名で全教職員に実施（2023年12月）。A「本校において解決したい『学校が抱える問題』」B「課題の解決のために、次年度のテーマ研修で取り組みたいこと」C「一般研修で、『新たに取り組んでみたいこと』」について、記述式のアンケート結果は、以下のとおりである。

本校において「解決したい学校が抱える問題」をご記入ください。 令和5年12月職員アンケート(自由記述)より	
1	業務の簡略化、システム化
2	学びに向かう力
3	子どもたちの心の安定
4	子どもたちが落ち着いて学習に取り組む環境、一人一人が自分にできることに取り組める授業のありかた
5	・学びに向かう児童の育成 ・児童同士の関係づくり ・教員の働き方の実践
6	主体的に学ぶための子どもたちの援助について
7	社会的な規範意識、ルールを守るという意識を身に付けさせたい。
8	児童、及び保護者の子育てへの意識改革。まるで、人ごとで、責任転化にきゅうきゅうとしているため。学校だけの取組だけでは、限界を感じる。

本校における「学校が抱える問題」のアンケート結果として、規範意識の低下や子供たちの学習に向かう力の弱さ、心の不安定さなどが挙げられた。集団規律に関する問題行動も頻繁に見られ、集団活動の秩序と学習環境に影響を及ぼすことが少なからずある状況にあった。日々共有してきた生徒指導上の課題と

して、「遅刻する児童、開始時刻に遅れる児童が複数おり、朝の会や授業、昼の活動を定刻に始めることができない。」「授業中に話し声が多く、教室内が騒がしく学習に集中できない状況や学習の成果が得られにくい状況がある。」「教職員に対する反抗的な態度や指示に従わない行動がみられる児童がいて、場の雰囲気が乱れ、落ち着かない。また、その行動を真似てしまう児童がいる。」等があった。これまで私たちは、これらの課題に対し、対処的な指導に終始していたのではないかと。子供たちが、「叱られないように行動する」では、叱られないことを目的に行動し、内発的な動機が欠如しやすくなり、自

己成長や社会性の学びを見失うことにつながってしまう。だから今、叱ることに頼らない教育や指導方法を取り入れることが重要だと考えた。これらの「学校が抱える問題」への解決に向け、学校全体で一貫した発達支持的生徒指導の取組が必要であり、適切な対策を講じることを決めた。そこで、校内研究におけるテーマを「自他の『よさ』に気付き、自己肯定感を高め、夢や希望に向かって学びの当事者として学び、高め合う児童の育成 ～UDL (Universal Design for Learning、学びのユニバーサルデザイン) と SWPBS の推進～」とし、UDL では、どの子ども学びにアクセスしやすい足場的な支援及び学びの自己決定場面を提供する授業 UDL を進め、児童主体の授業の充実を目指した。本報告では、SWPBS の実践を振り返る。

3 実践のねらい

SWPBS の導入により、ポジティブな行動を強化し、問題行動の減少と学校全体の学習環境の改善を目指す。子供たちが、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力の育成を目指した。

(1) PBS を学校全体で組織的に行う SWPBS とは

SWPBS は、学校環境全体で児童生徒の望ましい行動を促し、問題行動を予防するための包括的なアプローチである。SWPBS の基盤は、応用行動分析 (Applied Behavior Analysis: ABA) の理論にあり、ABA は行動科学に基づき、人々の行動を観察し、その行動が環境とどのように相互作用するかを理解しながら、望ましい行動を引き出し、不適切な行動を減少させる方法である。(図4)

ABAの基本原理とSWPBSの関係		
	ABAの原理	SWPBSへの適用
1. 行動の強化 (Reinforcement)	望ましい行動が取られた際、その行動が強化されると、同じ行動が将来繰り返される可能性が高まる。	ポジティブな行動に対して具体的な賞賛や報酬を与えることで、生徒がその行動を繰り返すよう促進する。
2. 予防(Prevention)	問題行動を未然に防ぐためには、望ましい行動を教え、その行動が起こりやすい環境を構築する必要がある。	問題行動が起こる可能性のある状況を分析し、環境を整えたりルールを明確にすることで、望ましい行動を促す。
3. データに基づく意思決定 (Data-Driven Decision Making)	行動を改善するには、観察とデータ収集に基づいて現状を分析し、計画的に介入を行う必要がある。	学校全体で問題行動の頻度、時間帯、場所などのデータを収集・分析し、効果的な介入方法を導入する。
4. 問題行動の機能的アプローチ (Functional Behavior Assessment: FBA)	問題行動には必ず目的(機能)があり、それを理解することで効果的な介入が可能になる。	学校全体で、特定の生徒や集団の問題行動の背景や目的を分析し、適切な支援を提供する。

【図4 ABA基本原理とSWPBSの関係】

(2) SWPBS を構成する 4 つの要素

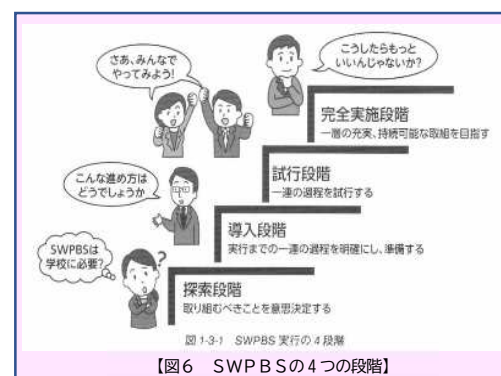
若林ら(2023)は、学校全体で組織的に PBS に取り組むために、SWPBS には大きく分けて 4 つの要素(図5)があるとしている。子供たちへの行動支援を行う“実践”、行動支援を実際に行う教職員へのサポート体制“システム”、学校・子どもの実態をデータに基づいて把握して実践・システムの改善に生かす“データ”、SWPBS の実行によって期待される最終的な子供たちの変容“成果”の4つである。



【図5 SWPBSの4つの要素】

(3) SWPBS 実施の 4 つの段階

若林ら(2023)は、SWPBS の一貫した取組が学校で実施されるまでには、2～4 年を要すると述べている。SWPBS によって安定した成果が得られる学校運営にたどり着くまでの過程は、大きく 4 つの段階があり(図6)、各段階は行き来しながら進行するものである。本実践は、探索、導入、試行段階にあたる。



【図6 SWPBSの4つの段階】

4 実施計画

- (1) 講義1「SWPBS 理論」宮崎大学大学院教育学研究科 立元 真教授 8/1
- (2) 講義2「SWPBS 理論」宮崎大学大学院教育学研究科 立元 真教授 8/21
- (3) SWPBS 実践 4 回(9 月、10 月、11 月、12 月)
- (4) 実践の評価と今後の取り組みについての検討 12/9

5 実際

(1) チームの編成(4 月)

SWPBS を導入するにあたり、年度始めに研修班として校内に推進チーム(図7)を結成した。生徒指導係、特別支援教育係、養護教諭、支援員で構成している。

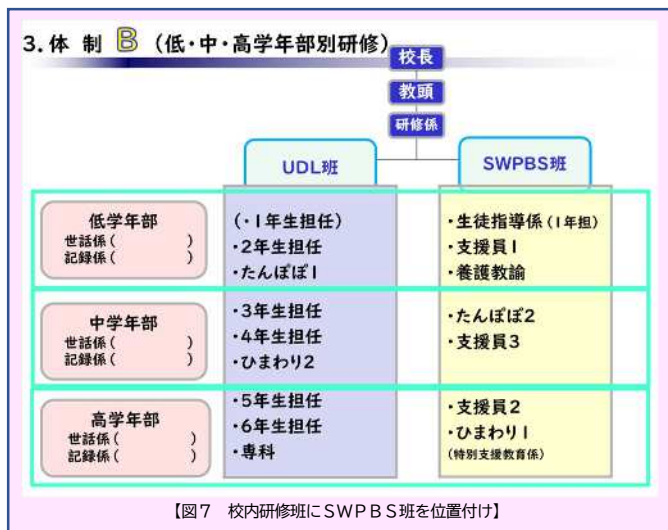
(2) 開始時期のずらし

2 本立てのテーマ研修の運営にあたり、第 1 期は、「授業づくり研修&授業UDL実践」を中心の研修を行い、「SWPBS」についての研修は第 2 期からの開始とした。2本のテーマ研修の開始時期をずらすことで、参加者の負担を軽くするよう工夫した。

(3) 専門家による講義(2 回/8 月)

全職員が SWPBS の理論について学び、理解をそろえて実践していくために宮崎大学大学院教育学研究科 立元 真教授を招き、2回の講義を実施した(写真1)。PBS の要件としての応用行動分析(図8)、ポジティブな行動の強化の具体例と弱化的危うさ(図9)など SWPBS の理論を学ぶことができた。また、本校での2学期からの実施に向け、「行動」か「状態」かの見分け方によるターゲット行動の絞り方(図10)について学び、ポジティブ行動マトリクス「有明小版」の作成に向け、示唆をいただいた。さらに、学校全体で進めることの大切さ、データに基づいた意思の決定、SWPBS における多層構造について共に実践を進めていく全教職員の学びをそろえた。

【写真1：立元教授による講義の様子】



(4) 期待する行動の明確化(8月)

1回目の講義後、「有明小学校ホジティブ行動マトリクス表」の作成にとりかかった。9月からSWPBS 実践化に向けて1か月での作業となった。推進グループが原案を作成し、立元教授のアドバイスをを受けて改訂案を作成、その後全教職員の合意を得る流れをとった。

学校教育目標
心豊かで、共に学び、夢に向かって生きぬく力をもつ児童の育成

校訓
笑顔いっぱい 花いっぱい チャレンジする有明小

ポジティブ行動マトリクスを作しましょう

・ポジティブ行動マトリクスは、言い換えれば、目標行動一覧
児童から見れば、学んで習慣化する
教員から見れば、教えていく 目標行動一覧です。

思いやりのある子	よく考える子	たくましい子
- 互いを認め合い、仲良く活動する。 - 明るくあいさつや正しい言葉遣いをする。 - 整理整頓を心掛け、物を大事にする。 - 郷土の良さを発見し、郷土を大切にすること。	- めあてをもち、自ら進んで学習する。 - 姿勢を正し、最後までしっかりと聞く。 - 自分の考えを堂々と表現する。 - 進んで楽しく読書に親しむ。	- 目標をもって体力づくりに励む。 - 姿勢を正し、最後までしっかりと聞く。 - 自分の考えを堂々と表現する。 - 健康や安全を考えて行動する。 - 進んで楽しく読書に親しむ。

有明小学校 ポジティブ行動マトリクス表(原案)

【図12 有明小学校ポジティブ行動マトリクス表(原案)】

- ① 児童生徒に期待する学校目標は、校訓(図11)を活用した。次に、解決したい課題として、「あいさつ」「話を聴く」「時間を守る」を設定した。さらに、学校目標に取り組む具体的な場面や活動をリストアップした。場面ごとに学校目標を達成するための具体的な行動が何であるかを考え原案(図12)にまとめた。講義内容を受け、具体的な行動目標は、初年度は少な目に設定し、子供たちをたくさん褒めてあげられるよう取り組みやすく、達成しやすいものにした。
- ② 原案への立元教授のアドバイスをを受け、より具体的に子供たちがイメージしやすく取り組みやすい行動指標(図13)に変更した(改訂部分朱書き)。例えば、「あいさつ」の課題に

有明小学校 ポジティブ行動マトリクス表(立元教授改訂案)			
	思いやりのある子 「あいさつをする」	よく考える子 「よく聴く」	たくましい子 「時間を守る」
登下校	- 門札をしよう - 地域の方にあいさつをしよう	- 信号を守ろう 500mゾーンは歩こう - 近くを走る車やバイクに注意しよう	登校のときは 7:50までに正門を通過しよう
授業時間中	- チャイムに合わせて「はじめましょう」のあいさつをしよう 3時間目のはじめに黙想をしよう	- 話す人を見て、話を最後まで聴こう - うなずくなど話している人に反応しよう	字を書くときに、立腰の姿勢をとりなおそう
休み時間	先生やお客様とすれちがうときには軽く頭を下げてえしゃくをしよう	予鈴を聞いたらずる席に着よう	教科書、ノート、筆記用具などをそろえておこう

【図13 有明小学校ポジティブ行動マトリクス表(立元教授改訂案)】

取り組みやすい行動指標(図13)に変更した(改訂部分朱書き)。例えば、「あいさつ」の課題に

対する休み時間の行動指標「先生やお客様とすれちがうときには軽く頭を下げよう」について、会釈という名称を子供たちが覚えさせた方が習慣化しやすくなるという助言から、「先生やお客様とすれちがうときには軽く頭を下げてえしゃくをしよう」に変更した。また、「時間を守る」の課題における休み時間の行動については、前の授業時間の終わり、あるいは教室の日程表などに授業のたびに用意しておくべきものを記述しておくなどすると、児童が褒めてもらいやすくなるといった指導の手立てについてもアドバイスを受けた。

- ③ マトリクス表改訂版の各項目について、教職員全員で合意し、一貫性のある指導を9月から開始することを確認した。また、助言を受け、9月からのSWPBSキャンペーンは教師主導のもので進めていくこととなった。マトリクス表の全ての行動目標の中から、有明小学校の児童に付けたい力を精選し、優先度の高い「時間を守る」の課題解決に向けた「登校の時は、7:50までに正門を通過しよう」推奨キャンペーンの実施を全教職員で合意し、指導を開始することにした。

- ④ 完成した「有明小学校ポジティブ行動マトリクス表」(図14)は、イラストを加えるなど視覚的に整理されたポスターとして各教室及び児童玄関正面に掲示した。明確な行動の目標が分かりやすく具体的に示されたことで、子供たちは学校内の各場面でのどのように振る舞うべきか理解でき、行動しやすくなる。

	優しいやりのある子	よく考える子	たくましい子
登下校	・挨拶をしよう ・地域の方にあいさつをしよう	・帰りを守ろう ・500mゾーンは歩こう ・近道を走る車やバイクに注意しよう	・登校のときは 7:50までに正門を通過しよう
授業時間中	・チャイムに合わせて「はじめましょう」のあいさつをしよう ・3時間目ははじまりに黙想をしよう	・話す人を見て、話を聴こう ・話を最後まで聴こう ・うなずくなど話している人に反応しよう	・字を書くときに、立腰の姿勢をとりなおそう
休み時間	・先生やお客様とすれちがうときには軽く頭を下げてえしゃくをしよう	・予鈴を聞いたらすぐ席に着こう	・教科書、ノート、筆記用具などをそろえておこう

全校で取り組む

【図14 有明小学校ポジティブ行動マトリクス表ポスター】

- (5) SWPBS キャンペーンのスタート(9月)

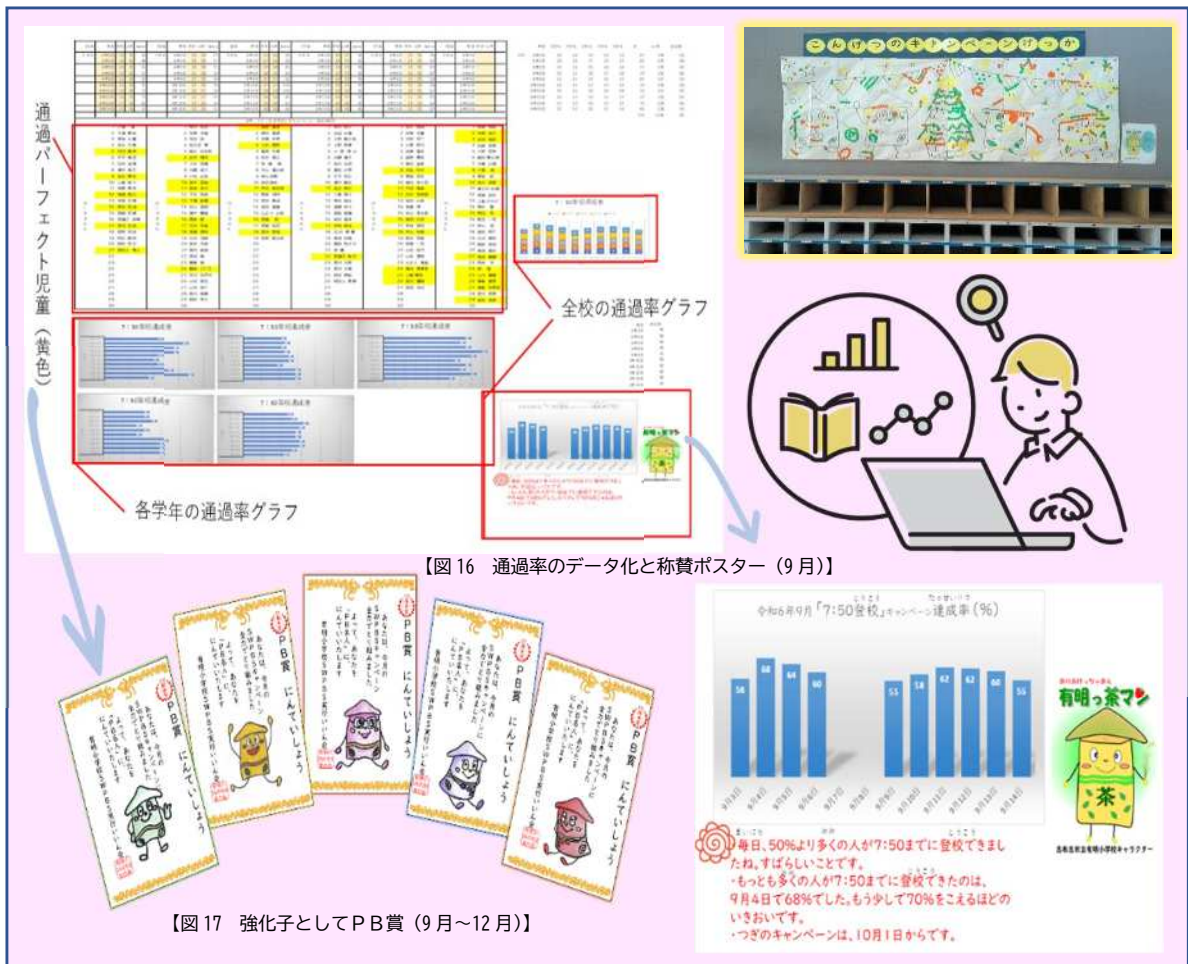
2学期始業式に学校長よりSWPBSが始まることが伝えられ、生徒指導係が「7:50までに登校」推奨キャンペーンを呼びかけた。また、児童による挨拶推奨キャンペーンも同時期に開始した。各教室でも担任から指導が行われ、全児童・教職員による取組がスタートした。

- ① 「登校の時は、7:50までに正門を通過しよう」推奨キャンペーン第1弾を9/3~9/14の期間で実施した。学年ごとにシールと台紙(図15)を配布し、通過できた日にシールを貼った。広幅用紙には、有明小学校キャラクター「有明っ茶マン」が描かれており、6等分したものを台紙として配布した。全校での2週間の取組を終えたときに1枚の絵を完成させる楽しみをモチベーションに取り組んだ。



【図15 強化子としてのシール台紙(9月)】

- ② 期間中の取組をデータ化し(図16)称賛した。また、期間中全て通過できた児童にPB賞(図17)を渡し、各教室で称賛の言葉を投げかけた。



望ましい行動へのフィードバックとしての強化子(行動の頻度を高める環境の変化や刺激)には、一般的に以下のようなものがある。

- ◎ 肯定的な注目(褒められる、認められる) → 担任からの賞賛
 - ◎ 目標に近づいていることを示すグラフなどの視覚的フィードバック → シール・グラフ
 - ◎ 花丸や肯定的なコメントを書いてもらう → PB賞
 - ・ 好きなシールやスタンプなど欲しいものがもらえる
 - ・ 好きな活動ができる
- ◎は、本実践で用いた強化子 → は、本実践での取組

今回のキャンペーンでは、上記の強化子より3つを用いた。視覚的なフィードバックとして、台紙に描かれたイラストの完成を楽しみに行動できたときにシールをはる。期間終了後に取り組み状況をグラフ化し、称賛の言葉をそえて掲示すること。さらに、個人のがんばりを称賛するPB賞をもらえ、加えて担任からの言葉かけにより肯定的な注目を得られることである。子供たちが望ましい行動を“またやってみよう”と思えることを期待したものである。応用行動分析によるこれらの強化子によって、子供たちは、望ましい行動をしたことが報われ・結果が伴い・評価されたことで、望ましい行動が定着していき、最初は褒められる・認められる、またはシール・チケットなどの付加的なものが強化子になっていたとしても、十分に強化される経験を積むことで、毎回褒めなくても行動できるようになっていくものである。

(6) データに基づく意思決定

キャンペーン後のデータを確認して終わるのではなく、データに基づいて現在の実践を続けるのか、改善するのか、改善するとしたらどのようにするのか毎月決定していった(図18)。



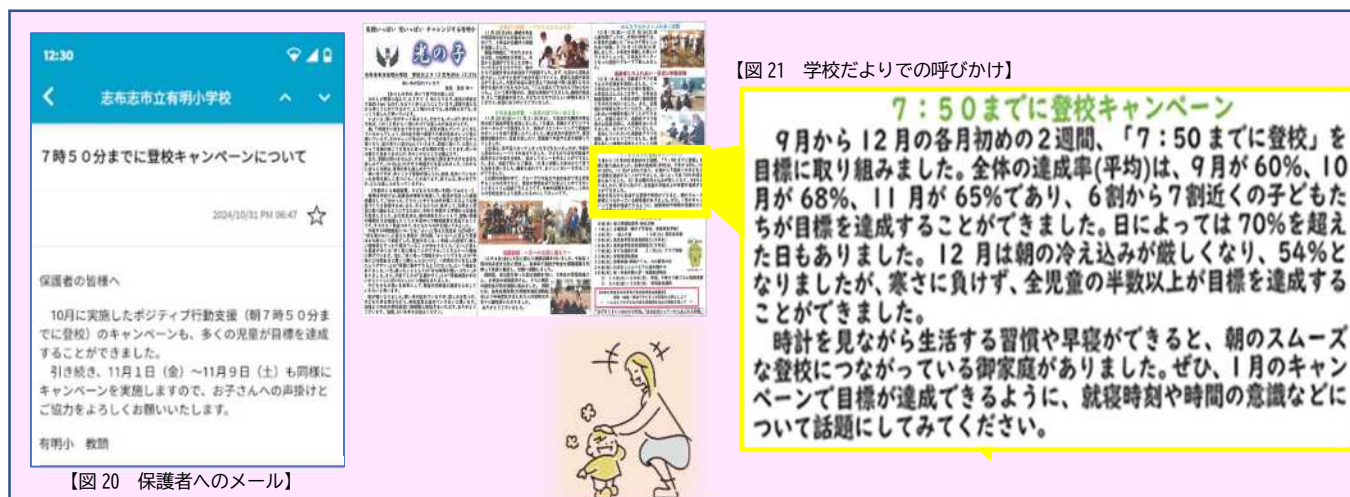
例えば、9月のキャンペーンでは、60%の児童が目標達成という高い実行度が確認された。地域ボランティアや学校長、各担任の観察によると、キャンペーン前の状態と比べて「(7:50までに正門未通過でも)遅刻する児童が減少」「朝の会の定刻開始」が確認された。「朝の遊びやボランティア活動の活性化」「落ち着いた雰囲気ですぐに1日がスタート」との成果を得た。よって、10月のキャンペーンも同様の内容で実施することを確認した。一方、改善として、シールが貼られた台紙を回収・掲示、データ入力やグラフ化、PB賞配布準備作業の時間確保のため、実施期間を月初めから土曜授業までとした。また、登校時刻に関する内容の特徴から家庭の協力を得るための働きかけをスタートすることにした。他にもボーナス月や積極的な取組が見られる児童の工夫やよさをシェアすることをねらうアンケート(図19)を実施した。

アンケート結果		R6 12月(学年1名抽出聞き取り)				
SWPBS 児童アンケート						
	1年 A	2年 B	3年 C	4年 D	5年 E	6年 F
よかったこと	朝の駆け足ができる。水やりができる。友達と遊んだり、話したりできる。	準備が早くできる。体力作りがたっぷりできる。	30分早起きできる	①お母さんに毎日ほめられた ②賞状をもらえたこと。 ③朝の時間にアティクができた。	外でたくさん遊ぶことができる。	時間に余裕ができた。読書をして過ごしている。
起床時刻	6:00	6:30	6:50	7:00	6:30	6:30
朝食開始	7:00	6:35	7:15	7:10	7:00	6:40
登校開始	7:35	7:00	7:40	7:30	7:25	7:30
入眠開始	21:00	21:00	21:00	21:00	21:00	21:30～22:00
その他	前の日の次の日の準備を済ませる。	早く寝て早く起きることを心がけている。	前の日に必要な物を準備する	早く寝る。	学校の準備を前日にする。	1年生の頃から7時40分～45分に着くようにしている。 1年生の頃は準備が遅かったのが早く行っていて、それが今も習慣になっている。

【図19 取組アンケート(抽出児童)】

(7) 保護者や地域社会との連携

家庭やコミュニティにおいても一貫した支援がなされるようキャンペーン前に全保護者に向けてメール（図 20）での理解と支援を呼びかけた。また、12 月の学校だより（図 21）では、家庭やコミュニティに向けてポジティブなフィードバックと共に理解と支援をよびかけた。さらに、家庭でのこつやよさを保護者間でシェアしていくことをねらい、保護者アンケートを実施した。



6 実践の成果と今後の展望（成果◎・展望※）

- ◎学校全体の雰囲気の改善
- ◎遅刻せずに登校できる児童の増加＝社会的スキルの向上
- ◎朝の活動の活性化
- ◎朝の会→1校時の定刻開始による学習時間の確保
- ◎教職員全員の共通認識により一貫した行動支援の実施
- ◎保護者からの喜びの声
- ※2層支援の開始、具体的なニーズに基づいた介入
- ※教師主導の取組から児童会、学級単位のイベントなど児童主導の取組への拡大
- ※様々な場面でのポジティブ行動マトリクス表の積極的活用
- ※キャンペーンの定期的な振り返りや検討、プランニングの工夫
- ※「学校楽しいと」「いじめアンケート」「欠席数」「問題行動」と結びつけた結果の評価
- ※登校後の過ごし方の指導



おわりに

先行研究から、PBSは子供の適応的な行動の増加、問題行動に注目するのではなく、「問題行動の代わりになるような望ましい行動を増やす」ことで自ずと問題行動の減少、学校風土の改善、学力の向上、さらに教職員の燃え尽き感の減少と自己効力感の改善などの効果が多数報告されていることを励みに全教職員、家庭、地域と一貫したポジティブ行動支援で有明小学校の子供たちの自己指導能力の育ちをこれからも支えていきたい。

